

令和3年度

即時型食物アレルギーによる健康被害に関する全国実態調査 報告書

令和4年3月

消費者庁

即時型食物アレルギーによる健康被害に関する全国実態調査

研究代表者 海老澤 元宏 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター
研究協力者 杉崎 千鶴子 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター
佐藤 さくら 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター
今井 孝成 昭和大学医学部小児科学講座

A. 調査目的

我が国の即時型食物アレルギーの変遷と現状を明らかにし、“食品表示法に基づくアレルゲンを含む食品に関する表示”の特定原材料等の妥当性及び改正の必要性を検討し、また、同法の遵守の状況を推測する。これ以外にも最新の大規模な食物アレルギーの疫学情報を基礎研究や臨床研究の資料として提供する。

B. 調査方法

平成 14 年度に食品衛生法に基づく食物アレルギー表示制度が完全施行され、2001・2002 年、2005 年、2008 年、2011 年、2014 年、2017 年と 3 年に一度即時型食物アレルギーに関するデータを積み重ねてきた。過去 6 回の調査の協力医師、調査対象、調査方法全てを踏襲し、継続性を重視した。協力医師はアレルギーを専門とする医師（日本アレルギー学会指導医及び専門医並びに日本小児アレルギー学会会員）6,529 名の中で調査の趣旨に賛同を得られたものとし、1,089 名の医師に参加協力が得られた。

調査対象は“食物を摂取後 60 分以内に何らかの反応を認め、医療機関を受診した患者”とし、食物経口負荷試験や経口免疫療法（OIT）により症状が誘発された症例は調査対象としていない。調査項目は、氏名（イニシャル）、性別、年齢、原因抗原の摂取食物種（自由記載）、原因抗原、臨床症状（皮膚、呼吸器、粘膜、消化器、全身から選択方式と自由記載方式の併用）、治療項目、原因抗原の特異的 IgE 値、転帰及び初発/誤食とした。

調査期間は 2020 年 1 月から 12 月で、調査方法は協力医師へ 3 か月毎にはがきを郵送する方法で行い、はがきでの報告又は要望に応じてメールでも報告を受けた。年齢群別解析は 0 歳群、1・2 歳群、3-6 歳群、7-17 歳群、18 歳以上群に分けて検討した。

C. 調査結果

1. 解析対象

第 1 回（2020 年 1-3 月） 1,727 例、第 2 回（2020 年 4-6 月） 1,886 例、第 3 回（2020 年 7-9 月） 1,736 例、第 4 回（2020 年 10-12 月） 1,328 例の計 6,677 例が報告された。報告のあった症例のうち、原因物質が特定されていない 414 例、原因物質が食物以外のもの 83 例（アニサキス 70 例、ダニ 13 例）、年齢性別や治療・転帰、初発/誤食が不明な症例等報告に不備があったもの 100 例を除外し、6,080 例を解析対象とした。解析症例数は前回調査 2017 年の 4,851 例から 25%増加していた。

2. 年齢、性別（図 1）

年齢は中央値が 2 歳、最高齢は 92 歳であった。最頻値は 0 歳の 1,876 例で 30.9%を占めた。また、1 歳が 12.8%、2 歳が 10.8%で、2 歳までに 54.5%を占め、6 歳までに 79.5%、11 歳までに 89.3%、18 歳までに 94.7%を占めた（図 1）。各年齢群の症例数は 0 歳群（1,876 例）、1・2 歳群（1,435 例）、3-6 歳群（1,525 例）、7-17 歳群（906 例）、18 歳以上群（338 例）であった。

男女比は 1.36（男性 3,507 例/女性 2,573 例）で男性に多い傾向であったが、年齢群別に異なり、0

歳群から7-17歳群までは男性の割合が多く、18歳以上群では女性が多かった。

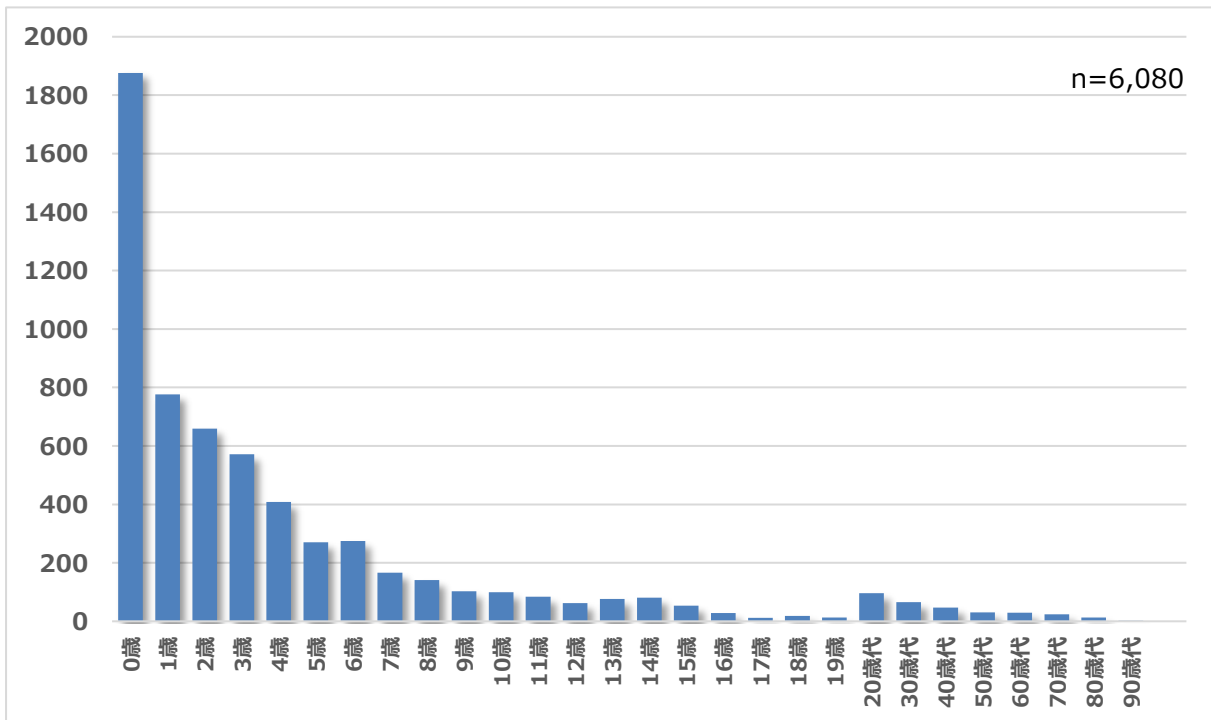


図1 年齢分布

※20歳以上は10代区切りで集計した結果である。

3. 即時型食物アレルギーの原因食物

1) 粗解析 (図2, 表1)

原因食物は鶏卵が最も多く33.4% (2,028例)を占めた。以下、牛乳が18.6% (1,131例)、木の実類が13.5% (819例)であった。前回の調査まで原因食物の上位3品目は鶏卵・牛乳・小麦であったが、今回の調査では木の実類の割合が増加し、第3位となった(前回8.2%、第4位)。落花生までの上位5品目で80.4%を占め、さらに、魚卵、果実類、甲殻類、魚類、大豆、ソバと続いた。

木の実類の内訳を表1に示す。クルミが463例(木の実類の56.5%)で最も多く、全体に対する割合は7.6%で、落花生の6.1%より上位であった。次いで、カシューナッツが174例(木の実類の21.2%)、マカダミアナッツ45例(木の実類の5.5%)が上位3品目であった。その他は、アーモンド、ピスタチオ、ペカンナッツ、ヘーゼルナッツ、ココナッツ、カカオ、クリ、松の実の報告があった。

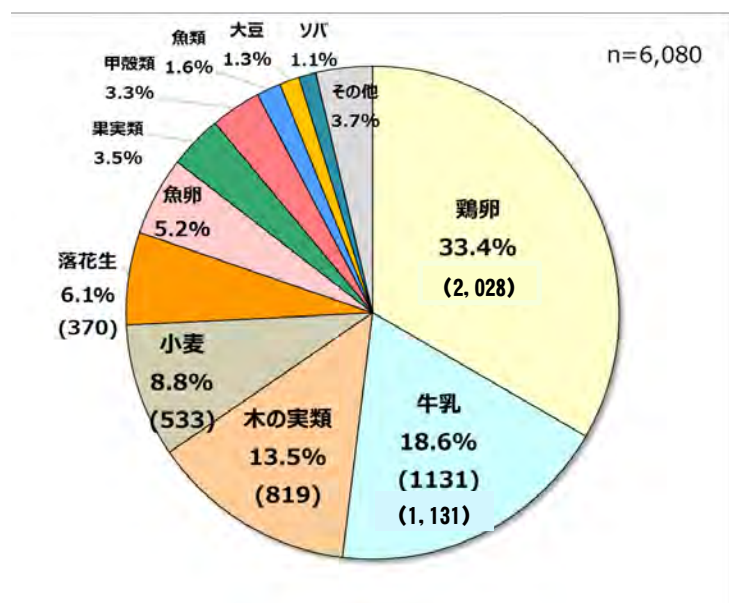


図2 即時型食物アレルギーの原因食物

表1 木の実類内訳

種類	n	全体に対する%
クルミ	463	7.6%
カシューナッツ	174	2.9%
マカダミアナッツ	45	0.7%
アーモンド	34	0.6%
ピスタチオ	22	0.4%
ペカンナッツ	19	0.3%
ヘーゼルナッツ	17	0.3%
ココナッツ	8	0.1%
カカオ	1	0.0%
クリ	1	0.0%
松の実	1	0.0%
ミックス・分類不明	34	0.6%
合計	819	

2) 年齢群別原因食物解析

i) 粗解析 (表2)

各年齢群において5%以上占める食物を表2に示す。

0歳群は鶏卵、牛乳、小麦で96.2%を占めた。1・2歳群から7-17歳群までは、鶏卵、牛乳、木の実が上位3品目を占めた。鶏卵・牛乳の占有率は加齢に伴い低下傾向にあり、0歳群では85.3%であったが、7-17歳群31.3%であった。木の実類は、1・2歳群で3位(15.4%)、3-6歳群で1位(27.8%)、7-17歳群で2位(16.9%)であった。18歳以上群では、小麦、甲殻類、果物類の順であった。

各年齢群において5%以上の頻度の原因食物が全体に占める割合は、0歳群は96.2%を占めるが、加齢とともに漸減し、18歳以上群では67.8%まで低下した。

表2 年齢群別原因食物(粗集計)

	0歳 (1,876)	1・2歳 (1,435)	3-6歳 (1,525)	7-17歳 (906)	≥18歳 (338)
1	鶏卵 60.6%	鶏卵 36.3%	木の実類 27.8%	牛乳 16.9%	小麦 22.5%
2	牛乳 24.8%	牛乳 17.6%	牛乳 16.0%	木の実類 16.8%	甲殻類 16.9%
3	小麦 10.8%	木の実類 15.4%	鶏卵 14.7%	鶏卵 14.5%	果実類 9.8%
4		魚卵 8.2%	落花生 12.0%	甲殻類 10.2%	魚類 7.7%
5		落花生 6.6%	魚卵 10.3%	落花生 9.1%	木の実類 5.9%
6		小麦 5.8%	小麦 6.7%	果実類 7.8%	牛乳 5.0%
7				小麦 7.6%	
小計	96.2%	89.8%	87.5%	82.8%	67.8%

注釈：各年齢群で5%以上の頻度の原因食物を示した。また、小計は各年齢群で表記されている原因食物の頻度の集計である。

原因食物の頻度(%)は小数第2位を四捨五入したものであるため、その和は小計と差異を生じる。

ii) 初発解析 (表 3)

初発例 3,905 例についての結果を表 3 に示す。

初発例の原因食物は 0 歳群こそ鶏卵、牛乳、小麦の順であったが、加齢とともに大きく変化し、1・2 歳群では鶏卵、木の実類、魚卵、3-6 歳群は木の実類、魚卵、落花生、7-17 歳群は甲殻類、木の実類、果実類、18 歳以上群は小麦、甲殻類、果実類の順であった。木の実類は 1・2 歳群で 2 位 (24.3%)、3-6 歳群で 1 位 (41.7%)、7-17 歳群で 2 位 (19.7%) といずれも上位 2 品目に入っていた。魚卵は 1・2 歳群で 3 位 (13.0%)、3-6 歳群で 2 位 (19.1%)、7-17 歳群で 4 位 (7.3%) で、6 歳までの割合が高かった。落花生は 1・2 歳群で 4 位 (9.3%)、3-6 歳群で 3 位 (12.5%) であったが、7 歳以降では 5% 未満であった。甲殻類は 7 歳以上の年齢群での割合が高く、7-17 歳群で 1 位 (20.2%)、18 歳以上群で 2 位 (15.8%) であった。小麦は 0 歳群で 3 位 (11.1%) であったが、1・2 歳群及び 3-6 歳群では初発例としての割合は 5% 未満と低く、7-17 歳群で 5 位 (5.3%) と再び増加し、18 歳以上群で 1 位 (19.7%) であった。

表 3 年齢群別原因食物 (初発例)

	0 歳 (1,736)	1・2 歳 (848)	3-6 歳 (782)	7-17 歳 (356)	≥18 歳 (183)
1	鶏卵 61.1%	鶏卵 31.7%	木の実類 41.7%	甲殻類 20.2%	小麦 19.7%
2	牛乳 24.0%	木の実類 24.3%	魚卵 19.1%	木の実類 19.7%	甲殻類 15.8%
3	小麦 11.1%	魚卵 13.0%	落花生 12.5%	果実類 16.0%	果実類 12.6%
4		落花生 9.3%		魚卵 7.3%	魚類 9.8%
5		牛乳 5.9%		小麦 5.3%	大豆 6.6%
6					木の実類 5.5%
小計	96.1%	84.2%	73.3%	68.5%	69.9%

注釈：各年齢群で 5% 以上の頻度の原因食物を示した。また、小計は各年齢群で表記されている原因食物の頻度の集計である。

原因食物の頻度 (%) は小数第 2 位を四捨五入したものであるため、その和は小計と差異を生じる。

iii) 誤食解析 (表 4)

誤食 2,175 例についての結果を表 4 に示す。

誤食例の原因食物は 0 歳群、1・2 歳群は鶏卵、牛乳、小麦が上位 3 品目を占めていた。3-6 歳群、7-17 歳群は牛乳、鶏卵、木の実類、18 歳以上群は小麦、甲殻類、鶏卵・果物類・牛乳・木の実類の順であった。小麦は 7-17 歳群で誤食例としての割合は一時低くなったが、18 歳以上群で 1 位 (25.9%) と再び高くなっていった。木の実類は 3-6 歳群で 3 位 (13.2%)、7-17 歳群で 3 位 (14.9%)、18 歳以上群で 3 位 (6.5%) で、幼児期 (1-6 歳) 以降に割合が高くなった。落花生は 3-6 歳群で 5 位 (11.4%)、7-17 歳群で 4 位 (12.7%) であったが、18 歳以上群では 7 位 (5.2%) であった。甲殻類は 18 歳以上群でのみ認められ、2 位 (18.1%) であった。

表4 年齢群別原因食物（誤食例）

	0歳 (140)	1・2歳 (587)	3-6歳 (743)	7-17歳 (550)	≥18歳 (155)
1	鶏卵 54.3%	鶏卵 42.9%	牛乳 30.8%	牛乳 25.8%	小麦 25.8%
2	牛乳 35.0%	牛乳 34.4%	鶏卵 25.3%	鶏卵 21.6%	甲殻類 18.1%
3	小麦 7.1%	小麦 11.4%	木の実類 13.2%	木の実類 14.9%	鶏卵, 果実類, 牛乳, 木の実類 6.5%
4			小麦 12.4%	落花生 12.7%	
5			落花生 11.4%	小麦 9.1%	
6					
7					落花生, 魚類 5.2%
小計	96.4%	88.8%	93.1%	84.2%	80.0%

注釈：各年齢群で5%以上の頻度の原因食物を示した。また、小計は各年齢群で表記されている原因食物の頻度の集計である。

原因食物の頻度(%)は小数第2位を四捨五入したものであるため、その和は小計と差異を生じる。

出現症状（図3）

1) 粗解析

皮膚症状が85.2%（5,182例）、呼吸器症状が36.4%（2,216例）、消化器症状が30.8%（1,870例）、粘膜症状が30.5%（1,853例）、ショック症状が10.9%（660例）であった。

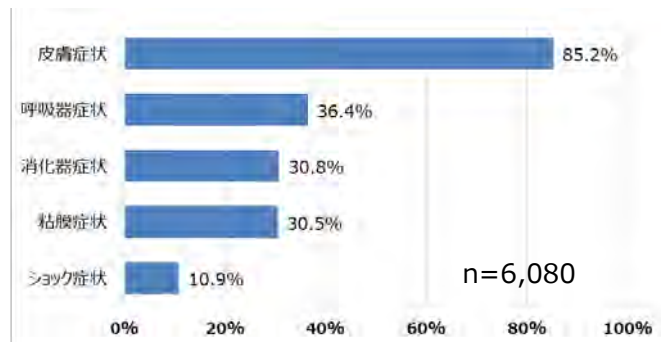


図3 誘発症状

2) ショック症状（図4, 表5）

ショック症状を認めた660例（10.9%）において、年齢は中央値3歳、最高齢は92歳であった。最頻値は0歳群152例であった。年齢群別のショック率は、0歳群が8.1%、1・2歳群が8.2%、3-6歳群が13.0%、7-17歳群が12.1%、18歳以上群が24.6%で、18歳以上群の発症率が高かった。初発でショック症状を引き起こした症例は357例（54.1%）であった。

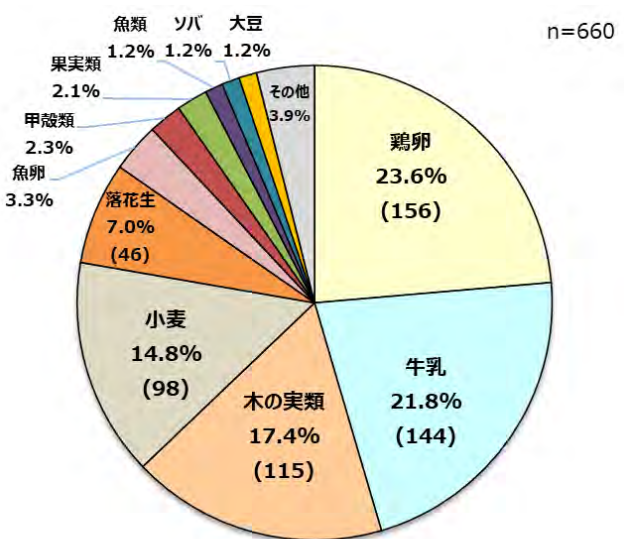


図4 ショック症状を呈した原因食物

ショック症状を引き起こした原因食物の上位3品目はこれまで鶏卵、牛乳、小麦であったが、木の実類の割合が増加し、第3位となった（前回12.8%、第4位）。木の実類の内訳を表5に示す。クルミは58例（8.8%）で最も多く、全体に対する割合は落花生7.0%より上位であった。次いで、カシューナッツが30例（4.5%）であった。

表5 ショック症例の木の実類内訳

種類	n	全体に対する%
クルミ	58	8.8%
カシューナッツ	30	4.5%
アーモンド	7	1.1%
ピスタチオ	6	0.9%
マカダミアナッツ	5	0.8%
ペカンナッツ	3	0.5%
ミックス・分類不明	6	0.9%
合計	115	

即時型食物アレルギーの原因食物として20例以上報告のあった食物でショック症状発生頻度が高かった上位5品目は、ピスタチオ27.3%（6/22例）、アーモンド20.6%（7/34例）、小麦18.4%（98/533例）、カシューナッツ17.2%（30/174例）、牛乳

12.7%（144/1,131例）であり、木の実類のショック発生頻度が高かった。一方でカニ4.8%（2/42例）、リンゴ5.0%（1/20例）、イクラ6.7%（20/300例）、バナナ6.9%（2/29例）、鶏卵7.7%（156/2,028例）は低かった。

ショック症状を認めた症例のその他の出現症状は、皮膚症状が84.8%、呼吸器症状が53.2%、粘膜症状が30.8%、消化器症状が48.6%であった。全体と比べて、ショック症例の呼吸器症状及び消化器症状の出現率が明らかに高かった。

4. アドレナリン使用及び入院加療

即時型症例6,080例において、1,279例（21.0%）でアドレナリンが投与され、1,406例（23.1%）で入院加療を要した。このうち、ショック症状を認めた660例のうち、413例（62.6%）にアドレナリンが投与され、434例（65.8%）が入院加療を要しており、全体のそれより明らかに高かった。

5. 初発・誤食例の解析（表3, 4, 6）

初発例が3,905例（64.2%）、誤食例が2,175例（35.8%）で、年齢群別の原因食物については上述の通りである（表3, 4）。年齢群別の初発例の割合は、0歳群の92.5%から1・2歳群の59.1%と大きく減少し、3-6歳群が51.3%、7-17歳群が39.3%であった。18歳以上群では少し増加し54.1%であった。

誤食の理由は“食品表示ミス以外”が2,022例（93.0%）、食品表示ミスが153例（7.0%）であった。食品表示ミスによる誤食例の原因食物の内訳を表6に示す。特定原材料7品目の表示ミスが83.6%（128例）であった。

6. 食物アレルギー表示の妥当性の検証（表7）

即時型症例6,080例において、特定原材料7品目によるものは71.3%（4,332例）を占め、特定原材料等21品目によるものを含めると93.4%（5,676例）を占めた。

ショック症例660例において、特定原材料7品目によるものは70.8%（467例）、特定原材料等21品目によるものを含めると92.9%（613例）を占めた。

これら特定原材料及び準ずるもの原因食物のカバー率はこれまでの報告と比較して変化していない。また、前回・前々回に引き続き、まつたけの症例報告はなかった。その他、前回に引き続き報告が少なかった品目はゼラチン（前回1例・今回1例）、アワビ（同4例・1例）、鶏肉（同3例・4例）、豚肉（同1例・4例*）、牛肉（同3例・5例*）であった（*「牛肉・豚肉」2例を重複計上）。

表6 表示ミスによる誤食例の内訳

	原因食物	度数	
●	牛乳	42	27.8%
●	鶏卵	40	26.5%
●	小麦	23	15.2%
●	落花生	20	13.2%
○	木の実類※	15	9.9%
●	甲殻類	3	2.0%
○	大豆	3	2.0%
○	モモ	2	1.3%
○	イクラ	2	1.3%
○	ゴマ	1	0.7%
	モヤシ※	1	0.7%
	花椒※	1	0.7%

●特定原材料（表示義務），○特定原材料に準ずるもの（表示を推奨）

※報告に準拠したため本来表示義務・推奨でないものが含まれる

表7 食物アレルギー表示の妥当性の検証

表7-1 即時型症例 n=6,080

	原因抗原	n	(%)
●	鶏卵	2,028	33.4%
●	牛乳	1,131	18.6%
●	小麦	533	8.8%
○	クルミ	463	7.6%
●	落花生	370	6.1%
○	イクラ	300	4.9%
○	カシューナッツ	174	2.9%
●	エビ	152	2.5%
○	キウイ	87	1.4%
○	大豆	79	1.3%
●	ソバ	69	1.1%
○	ヤマイモ/ナガイモ	48	0.8%
	マカダミアナッツ	45	0.7%
●	カニ	42	0.7%
○	アーモンド	34	0.6%
	木の実類 (分類不明)	34	0.6%
○	ゴマ	33	0.5%
○	バナナ	29	0.5%
	魚類 (分類不明)	28	0.5%
	ピスタチオ	22	0.4%
○	イカ	21	0.3%
○	リンゴ	20	0.3%
	ヘカンナッツ	19	0.3%
○	モモ	18	0.3%
	ヘーゼルナッツ	17	0.3%
	ホタテ	16	0.3%
○	サバ	14	0.2%
	タラコ	11	0.2%
	トマト		
	オオムギ	9	0.1%
○	サケ	8	0.1%
	メロン		
	ココナッツ		
●	エビ・カニ	7	0.1%
	サクランボ	6	0.1%
	タコ		
	コメ		
	アサリ	5	0.1%
	パイナップル		
	タラ		
	アカウオ		
	アジ		
○	鶏肉	4	0.1%
	ハチミツ		
	マグロ		
	タケノコ		
	ブドウ		
	ブリ		
	モヤシ		
	アボカド		
○	オレンジ	3	0.0%
○	牛肉		
	ほか 11 品目		
○	豚肉	2	0.0%
○	牛肉・豚肉		
	ほか 15 品目		
○	アワビ	1	0.0%
○	ゼラチン		
	ほか 42 品目		

表7-2 ショック症例 n=660

	原因抗原	n	(%)
●	鶏卵	156	23.6%
●	牛乳	144	21.8%
●	小麦	98	14.8%
○	クルミ	58	8.8%
●	落花生	46	7.0%
○	カシューナッツ	30	4.5%
○	イクラ	20	3.0%
●	エビ	13	2.0%
●	ソバ	8	1.2%
○	大豆		
○	キウイ	7	1.1%
○	アーモンド		
	ピスタチオ	6	0.9%
	木の実類 (分類不明)		
	マカダミアナッツ	5	0.8%
○	ヤマイモ/ナガイモ	4	0.6%
○	ゴマ		
	ヘカンナッツ	3	0.5%
	ホタテ		
	魚類 (分類不明)		
●	カニ	2	0.3%
○	モモ		
○	バナナ		
	ハチミツ		
	コメ		
	トマト		
○	オレンジ	1	0.2%
○	リンゴ		
○	牛肉・豚肉		
	ブリ		
	カレイ		
	サバ		
	イワシ		
	マグロ		
	タラコ		
	カレイの卵		
	トウモロコシ		
	茶葉		
	モスク		
	アメリカンチェリー		
	オオムギ		
	ひよこ豆		
	ニンニク		
	インゲン		
	エシャレット		

D. 考察及び結論

2020年の調査では6,080症例の即時型食物アレルギー症例が集積され、2017年調査(4,851例)における増加に引き続き、増加傾向であった。

原因食物については、前回調査(2017年)まで原因食物の上位3品目は鶏卵、牛乳、小麦であったが、今回の調査では木の実類の割合が13.5%に増加し(前回8.2%、4位)、小麦を抜いて主要3大原因食物の一つとなった。類としてではなく個別に解析してみても、木の実類の中で1位であるクルミは463例(全体の7.6%)で、鶏卵、牛乳、小麦に次いで第4位となり、2位のカシューナッツは174例(全体の2.9%)で、エビ152例、カニ42例、大豆73例より頻度が高かった。

年齢群別にみても、木の実類は1・2歳群では第3位15.4%(前回4位7.9%)、3-6歳群では第1位27.8%(同3位18.3%)、7-17歳群では第2位16.8%(同3位12.9%)と、前回調査と比べて明らかに増加していた。特に1・2歳群の増加は著しく、約2倍になっていた。

木の実類の増加傾向について2005年以降の傾向をみると、上位品目の鶏卵、牛乳、小麦がほぼ横ばいであるのに対して2014年以降、木の実類は増加している(図5)。木の実類の内訳をみると、クルミの増加が著しく、次いでカシューナッツが増加している(図6)。

木の実類が増加した理由については、今後、様々な観点から検討すべき課題であるが、2005年以降のクルミの年間消費量¹⁾、カシューナッツ及びアーモンドの年間輸入量²⁾は漸増しており、国内消費量の増加が要因の一つである可能性も考えられる。

一方、果実類の頻度は前回調査と比較して減少しており、1・2歳群では第7位3.1%(前回調査第5位6.7%)、3-6歳群第7位2.9%(同第4位9.8%)、7-17歳群第6位7.8%(同第1位21.5%)、18歳以上群第3位9.8%(同第4位12.8%)であった。18歳以上では甲殻類と運動誘発によるものと考えられる小麦の頻度が高く、前回調査までと同様の傾向であった。

初発例と誤食例の原因食物については、初発例では0歳群は鶏卵、牛乳、小麦の順であったが、1歳以降の幼児期は木の実類、魚卵、落花生、学童期(7-12歳)以降は甲殻類、木の実類、果実類の頻度が高く、18歳以降は小麦が再び増加しており、年齢群により著しく異なっていた。一方、誤食例では、0歳群から7-17歳群までの各年齢群で鶏卵、牛乳が上位2品目を占めており年齢群による違いを認めなかったが、3歳以上の年齢群では初発例と同様に木の実類、落花生の頻度が増加していた。

前回調査から木の実類(特にクルミ及びカシューナッツ)の症例数の増加が顕著であり、今回調査においても同様の傾向が認められたことから、即時型食物アレルギーの原因食物としての木の実類の増加は一時的な現象ではないと考えられる。また初発例と誤食例では年齢群により原因食物は異なり、

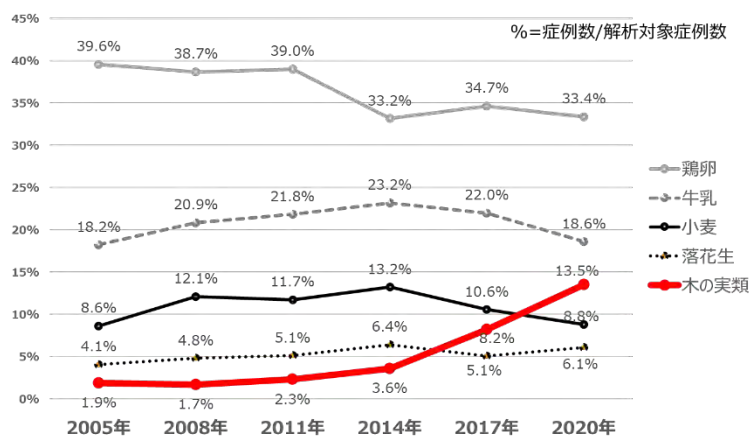


図5 上位品目の症例数比率の推移

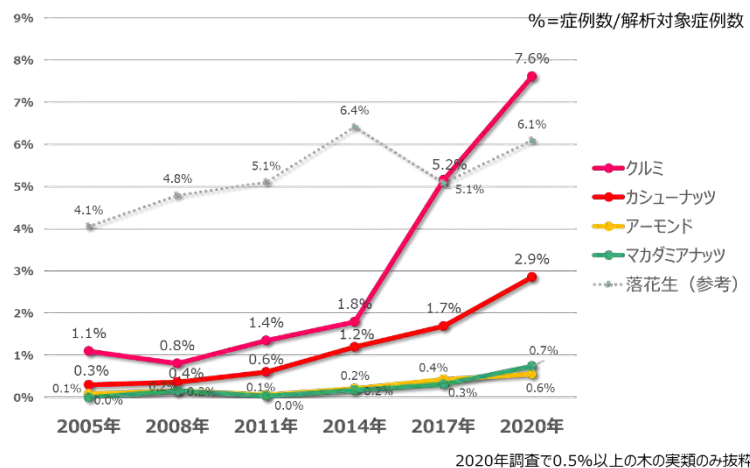


図6 木の実類の症例数比率の推移

2020年調査で0.5%以上の木の実類のみ抜粋

特に初発例では年齢により原因食物の頻度が大きく変化するため、それらの特徴を踏まえて疾患啓発や対策を講じる必要がある。2014年調査の魚卵類、前回調査と今回の調査における木の実類の増加から鑑みると、即時型食物アレルギーの原因食物は、経年的に変化することは明らかである。食物アレルギー患者が安心して生活できる社会を築くためには、本調査で得られる結果に基づいた施策の実施や医療現場における診断・治療・管理に速やかに反映させることが重要である。その点においても、本調査は継続的に行われる必要がある。

ショック症状の発生率は過去の調査とほぼ同程度の10.9%であった。ショック症状に対するアドレナリン使用率や入院率は高く、これらの結果は即時型食物アレルギー症例の少なくない割合が重篤な転帰をたどっていることを示す。全症例におけるアドレナリン使用率は過去2回の調査と同等の21.0%であったが、入院率は23.1%と過去3回と比較し増加傾向であった。一方、ショック症例を抽出した場合のアドレナリン非投与率は37.4%、入院していない割合も34.2%であり、過去の調査と比較してもアドレナリン非投与率は改善傾向になく、アナフィラキシー及びアナフィラキシーショック時の適切な治療はいまだ十分に行われていない。アナフィラキシーの初期対応について、医師への啓発及び患者指導の強化が必要と考えられる。

全体の35.8%が誤食による症状誘発であり、これまでの調査と同様に引き続き高い割合を示した。誤食例の中で“表示ミス”による健康被害は7.0%に認められた。食品表示法で食物アレルギー表示が管理されているにも関わらず“表示ミス”による誤食は経年的に減少していない。本調査からそれらの要因について明らかにすることはできないため、引き続き違反事例及び自主回収事例に関する情報並びに行政による監視の結果に関する情報の収集に努める必要があると考える。食品製造及び販売会社における徹底した管理が、食物アレルギー患者が安心して生活できる社会へと繋がる。また食物アレルギー表示を正しく理解し、安全に食品を購入できるように、医師や管理栄養士などへの啓発は引き続き必要である。

2020年の調査では、全体の症例数及び原因食物における木の実類の増加傾向が顕著であった。新規発症による症例の増加（初発例の比率は2017年57.8%→2020年64.2%）を認めており、食物アレルギーの有病率が増加している可能性はあるが、食物アレルギーに関する一般の人の関心の高さ、診療レベルの向上、本研究の反復性による協力の得られやすさ等、種々の要因が考えられる。そのため本調査から特定の要因を判断することは難しい。また、前回調査から引き続きクルミを筆頭に木の実類の即時型食物アレルギーの健康被害は増加していることが明らかになった。国民の健康を守るため、誤食症例の発症を予防するための施策が求められ、アナフィラキシー対応の一貫として加工食品の食物アレルギー表示の制度の更なる充実が必要である。

参考資料

- 1) 農林水産省 特用林産物生産統計調査 http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/tokuyo_rinsan/
- 2) 日本ナッツ協会 輸入統計 http://www.jna-nut.org/wordpress/?page_id=83